

町内井戸めぐり③

—古井戸より出るもの—

小波津団地の近くに津記武多グスクという遺跡があり、そのグスクの麓には、津記武多ガーと呼ばれる小さな古井戸があります。井戸の造りは円形の石積み（井戸口横九十七センチ、縦百十二センチ、深さ五十八センチ）で、現在は土砂で埋まり、水も枯れてしまっているのですが、グスクで使用されていたという伝承があります。また、この井戸が小さかったために津記武多グスクの按司（在地領主）が減びてしまった、という伝説も残っています。

津記武多按司の妻はとてきれいな人で、毎日の沐浴も



「グスクの麓にひっそりたたずむ津記武多ガー」

欠かすことがなかった。しかし津記武多ガーは小さく、水量もわずかであったので少し離れたテイラサガー（現在の県営西原団地近く）まで通っていた。ある日、いつものようにテイラサガーで髪を洗っていると、幸地グスクの按司・熱田子アツタシが通りかかり、その美貌にほれてしまった。そのことを知った津記武多按司は怒り、熱田子を滅ぼそうとするが、反対に返り討ちにあってしまう。

この話はあくまでも伝承に過ぎませんが、津記武多按司と熱田子の話は、近世の史料『球陽』外巻・「遺老説伝」にも記載されています。

津記武多ガー以外にも、町内の古井戸に関する伝承はたくさんあります。井戸の水は枯れてしまっても、それにまつわる話は今なおコンコンと湧き出るので。みなさんも近所にある井戸の話、聞いたことがありますか？

古井戸を発掘調査してみると何か出てくるかもしれませぬ。